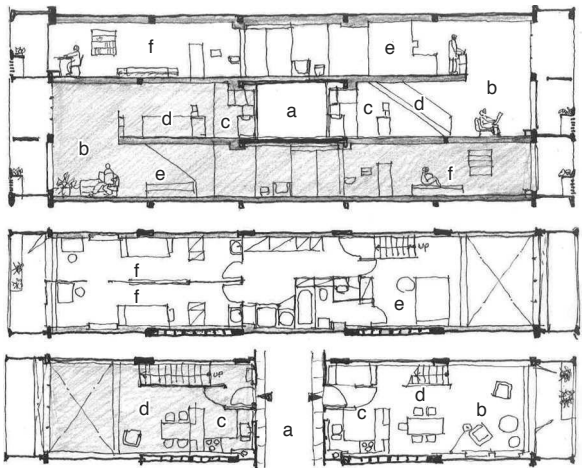
20世紀の建築空間遺産 9

地域建築空間研究所 小林 良雄
写真：丸谷博男

ユニテ・ダビタシオン　1952年　ル・コルビュジェ

西側外観　ポツ窓部分廊下階エレベーターホール　不停止階共用室



上：住居部分断面図　下：住居部分平面図　a廊下　b居間
cキッチン　dダイニング　e主寝室　f子供室

左上 居間　右上 キッチン　左下 中2階から居間を見下ろす
右下 屋上、排気塔と斜路、2階建ての保育園を見る。右側走行コース

充実した居住空間と都市での孤立

第二次世界大戦が終結した1945年、フランスの復興相はル・コルビュジェにマルセイユに建設する集合住宅の設計を、条件を付けずに依頼した。'33年のCIAMで定めたアテネ憲章を基にする著作「輝く都市」（'43年）で説いた「太陽・空間・緑」を謳う機能主義的都市像に共感してのことであろうか。そこでは都市機能を担う道具として住居単位、仕事単位、休息・娯楽単位、交通単位の概念を示し、住居単位が備えるべき生活施設に言及している。

マルセイユの「ユニテ・ダビタシオン」はその住居単位の最初の実現例である。逞しい柱で約8mの高さに支え挙げた人工地盤上に17層の住居・337戸と共用施設を納めている。幅24m長さ140mの住棟は長軸を南北にセットし、共用施設階以外の住居部分は中廊下が3層に1本、計5本で、地上の玄関ホールと4台のエレベーターで結んでいる。

自然光なしの中廊下は、計画時に衛生関係者から「精神病の原因になる」と批判された。照明や壁面に色彩含め工夫が凝らされているが、薄暗いトンネルに変わりはない。それだけに住居内部の明るさが身にしみる関係だ。

住居は単身者用から4人家族向けまで全23タイプある。特徴は、標準4人家族の1住戸の東西面どちらか側が2層、断面がL型か逆L型で廊下を中心に二つ巴に噛み合っていることだ。1住戸は東西両面から日照を得られる。

居間のバルコニー側は吹き抜けていて光は奥まで届く。窓建具は木製で中間のRCの梁の上部は格子目のガラス嵌殺し、下部は4枚の折れ框戸、2枚づつ両側に折りたたむと部屋幅いっぱいに開き、バルコニーと一体化できる。幅広く分厚い木板の下框はベンチになる等、工夫が多い。

細かく配慮されたキッチンはペリアン担当で、デザイン密度は高い。よく幅狭さが批判対象になる子供室は、白ボードの現寸模型と異なり、床や家具、壁や棚に素材感があり、外への見通しと自然光が入るので狭さを感じさせない。

8、9階には商店とレストラン付きホテルや、洗濯室などがあり最上階には幼稚園がある。地上56mの屋上はさながらドライな空中庭園で、スポーツ・ジムと保育園が独立して建ち、屋外集会場やプール、300mの走行コースもあり、太い排気塔と相まち大型客船の上部甲板を想起させる。これらの共用施設は住居単位に備えるべきとされていた。

渾身の意欲作であり、今も居住者に愛され、内部の充実は明白だ。しかし、都市との関係は切れている。まさに海原を行く客船のように孤立し、複数棟建てても間隔は空き、相互に疎遠で都市性は生まれず、コルビュジェの都市像の誤りを証拠立ててもいる。その相反する評価を含めて問題作であり、20世紀中期を代表する空間遺産である。